



『私、能力は平均値でって言ったよね！ リリイのキセキ』書き下ろしショートストーリー
『猫拾った』

王都近郊の草原で、採取のお仕事からの帰り道に可愛い生き物を拾った。

最初は拾っちゃダメかなって思つて無視して歩いていたのだけれど、ちょこちょことわたしの後をついてくるの。王都門をくぐって、町中に入つても、ずっとついてくる。

振り返ると、「にゃあ」と鳴く。可愛い。すごく。それで、どこまでもついてくるものだから、ついつい連れて帰つてしまつた。

丸テーブルの中央でのんきに伸びをしている茶虎の子猫を挟んで、わたしは不機嫌なラフィネに懇願した。

「ねえ、飼つてもいいでしよう？」

ラフィネは面倒くさそうに頬杖をついて、いつもの眠そうな半眼で表情を歪めている。

「だあ～め。捨ててきな。あたし、魔物とか動物はムリなの。邪魔だし、めんどいし、うるさい。そもそも、一ちどらリリイを一匹飼つてるだけでも大変なのよ」

ラフィネの中じや、魔物と動物とわたしは同列だったの!?

「こんな小さな子猫を王都の外に追い出したら、すぐに魔物に食べられちゃう。それにこの子、わたくしやラフィネと同じで家族がいないんだよ。可愛そりゃだよ」

「別に。まったく。全然」

わあ、素つ気ない。

子猫はといえばラフィネに興味しんしんで、鼻先を彼女の手に近づけてニオイを嗅いでいる。ラフィネが顔をしかめて、片手で子猫をテーブルの中央へと押し戻した。

「いい、リリイ？　ここはあたしの家。決めるのは、あんたじやない。あたし」

「お願ひ、ラフィネ。ちゃんとお世話するから。あ、もちろん子猫だけのことじやないよ？　ラフィネのことだつて、わたしが頑張つて育てるもん。立派なおばさんになれるように」

丸テーブルの斜め左側の席についているラフィネの頸が、突然頬杖から滑り落ちた。黙つたまま斜め右側の席に座つて様子を眺めていたベイルくんが、ぽつりと漏らす。

「……九歳の子供が二十二歳の女性に向かつて言う言葉じやないな。言うほうも言うほうだけど、言われるほうも言われるほうだ」

ラフィネが両耳を塞ぎ、顔を真つ赤にして叫ぶ。

「うるさいうるさいうるさいあく！　何よ、ベイルまで一緒になつて！　わかつた！　わかりました！　ただし、条件をつけさせてもらうわよ！　飼い主を捜すこと！」

ラフィネが一度言葉を切つて、仏頂面で言い捨てた。

「あんたの言い分だと、この猫に家族を与えてやりたいのよね？」

「うん。家族になろーよ。わたしと、ラフィネと、猫さんで！」

「かっ！　冗談じやないわ！　里親でも飼い主でも親猫でも何でもいいから、とにかくこいつの引取先を探しなさい。それが見つかるまでなら置いといていいから。世話はリリイ、あんたが責任持つてすること！　いいねっ？」

わたしは少し考えて、嬉しくなつた。だって、それって。

「見つからなかつたら、ずっと一緒にいられるってことだよねっ？」

ベイルくんが呆れたように片手で額を覆つて、ラフィネが額に血管を浮かせた。
なんでなんで？

けれどラフィネはすぐに表情を戻して、あきらめたようにつぶやく。

「……まあいいわ。あたしのほうからギルドに親探しの依頼出しとくから。あんたはせいぜいタイミングミットまでその駄猫と馴れ合いな。そんで情でも移つて、いざ返すときに泣き別れるがいいわ。あつははははは！」

それだけを告げるとラフィネは椅子から立ち上がり、つかつか歩いて自分の部屋へと戻つていった。けれども、ドアを閉ざしたと思つたらすぐに開け、顔だけを覗かせる。

「リリイ、今日の晩ご飯は？」

「あ、いまから作るよ。今日はね、オロシソ添えのオーケバーグだよ」

聞いた途端、頬の横でパンと両手を合わせてラフィネが花のようにな笑つた。

「わーい、やつたあ！ 焼けたら呼んでね。熱々のうちによ？ でも猫はだめ！」

単純。ずっとそうしていれば、とっても美人なのに。

再度、ドアが閉ざされる——直前に彼女を追つて部屋にするりと入つていった子猫の存在に、ラフィネが気づいた様子はない。

十日後、ペイルくんから飼い主が見つかったと報された。なんでも、王都門近くで兵士を相手にレストランを開いているオーナーの、五四の飼い猫のうちの一匹だつたらしい。

ちよつと残念。でも、でも。

わたしは、子猫の脇に両手を入れて抱え上げ、太陽にかざして微笑む。

「よかつたねえ。わたしたち三人はみんな本物の家族を失つてきたけれど、君はまだ大丈夫なんだつて。ちゃんと帰れるよ。だから、幸せになつてね」

子猫はわたしを見つめながら髭を下げて、一度だけ大きく「にゃあ」と鳴いた。

ちなみに子猫を返すとき、ラフィネはすり泣きが聞こえる部屋から一步も出でることはなかった。

情が移つちゃつたみたいで……。

『私、能力は平均値でって言つたよね！ リリイのキセキ』書き下ろしショートストーリー

『俺はただ帰りたいだけ』

リリイと一緒に、スマムの子供たちと採取仕事をした帰り道。王都近郊の草原で、一匹の子猫と遭遇した。

子猫はリリイをいたく気に入つたらしく、どこまでもついてきた。草原を越え、街道を越え、王都門をくぐつて平民街を歩き、ついには彼女が間借りしているアルステア家までだ。

「ねえ、飼つてもいいでしよう？」

アルステア家の居間、丸テーブルの上に子猫を置いて、リリイは家主であるラフィネさんに懇願している。一方のラフィネさんは、面倒くさそうに歪めた表情で頬杖をついていた。

「だあ～め。捨ててきな。あたし、魔物とか動物はムリなの。邪魔だし、めんどいし、うるさい。そもそも、こちどらリリイを一匹飼つてるだけでも大変なのよ」

ずっとこの調子だ。空気が重い。ピリついている。

俺、なんで同席してんのだろう……。こんなことならさっさとスマムに帰るんだった……。

「あの、俺もう帰つても——」

言いかけた俺の言葉を遮つて、リリイが悲しげな顔でつぶやいた。

「こんな小さな子猫を王都の外に追い出したら、すぐに魔物に食べられちゃう。それにこの子、わたくしやラフィネと同じで家族がいないんだよ。可愛そうだよ」

「別に。まったく。全然」

睨み合っている。テーブル中央で伸びをしている子猫越しに。
だめだ。話を聞いてもらえない。

子猫はといえばラフィネさんに興味が出たようで、鼻先を彼女の手に近づけてニオイを嗅いでいる。ラフィネさんは容赦なく、片手で子猫をテーブルの中央へと押し戻したけど。

「いい、リリイ？ ここはあたしの家。決めるのは、あんたじゃない。あたし」

「お願ひ、ラフィネ。ちゃんとお世話するからあ。あ、もちろん子猫だけのことじやないよ？」 ラフィネのことだつて、わたしが頑張つて育てるもん。立派なおばさんになれるようにな

丸テーブルの斜め右側の席に座るラフィネさんが、突然頬杖を崩した。

前々から気になつてはいたのだが、どういうわけかこのアルステア家では九歳のリリイが家事と仕事を一手に行い、二十二歳のラフィネさんは家でだらだらしているだけだ。リリイが楽しそうにしているのが救いだが、かなり異常だとは思う。

俺は思わず、ぽつりと漏らす。

「……九歳の子供が二十二歳の女性に向かつて言う言葉じやないな。言うほうも言うほうだけど、言われるほうも言われるほうだ」

ラフィネさんが両耳を塞ぎ、顔を真っ赤にして俺を睨んだ。

「うるさいうるさいうるさあい！ 何よ、ベイルまで一緒になつて！ わかつた！ わかりました！ ただし、条件をつけさせてもらうわよ！ 飼い主を捜すこと！ 里親でも飼い主でも親猫でも何でもいいから、とにかく二つの引取先を探しなさい。それが見つかるまでなら置いといいでいいから。世話はリリイ、あなたが責任持つてすること！ いいねっ？」

リリイが嬉しそうにテープルに乗り上げて言つた。

「見つからなかつたら、ずっと一緒にいられるつてことだよねっ？」

その加減無用のポジティブさよ……。

俺は片手で額を覆つた。火に油だ。ラフィネさんも顔をしかめている。

「……まあいいわ。あたしのほうからギルドに里親捜しの依頼出しとくから。あんたはせいぜいたイムリミントまでその駄猫と馴れ合いな。そんでも情でも移つて、いざ返すときに泣き別れるがいいわ。あつはははは！」

……なんてことを言うんだ、この大人げない大人は。

高笑いしながら自室に帰る彼女の足下を、子猫がついていつたことには気づかなかつたようだ。しかも去り際、チラりとこっちに視線を向けたことから、どうやら依頼出しは俺の役目らしい。というか、現役ハンターは俺だけだから、たぶんラフィネさんの中ではもう依頼は出したことになつてているのだろう。

まあ、並外れた魔法能力を持つリリイや、卓越した剣技のラフィネさんの力を度々借りている俺としても、この二人の関係がギクシャクしているのはあまりよろしくない状況だ。

仕方がない。ここはハンターの俺が一肌脱いで、子猫の引取先を探してやらなければ。

十日ほどで、子猫の身元は判明した。

王都門近くで兵士相手にレストランを開いているオーナーの飼い猫だつたらしい。太ったオーナーは相当探し回り、かなり瘦せたそうだ。

きっとリリイもラフィネさんも喜んでくれる。そう思つていた……のだけれど。いままさに、子猫の引き渡しが行われている。窓の外で。リリイの手によつて。けれど俺の目の前では、自室のベッドに突つ伏して悔しそうに枕を拳で叩きながら泣いているラフィネさんがいた。どうやら情が移つてしまつたのはリリイではなく、ラフィネさんのほうだつたようだ。

「あああああ、あたしの猫なのにいい……。誰だか知らないけど、飼い主を見つけたハンターをあたしは絶対に許さないッ、絶対によッ！」

「……!?」

俺は生唾を飲み、黙つたまま逃げるよう立たち去つた……。